



タイルの中に永遠に続くサイクルが宿る

展示ごとにパターンを作り続けていた guse arsは、表現の媒体として「タイル」を意識するようになった。

村橋「陶片を陶器に戻せば、いつかかけらになり、それをまた拾って…という永遠に続けることができるサイクルになるなど考えるようになりました」

2014年6月、このサイクルを実験的にタイルで試みた展示「2014 to 3719 - ceramic tile posterity -」を開催。さらに、同年7月に名古屋でも展示を行い、その際に多治見市のタイル関係者が会場を訪れ、それがきっかけで2015年のモザイクタイルミュージアムオープン前のプレ展示に招かれた。

村橋「展示は『washed pattern“TAJIMI”～欠片から生まれる未来の模様～』と題し、

多治見の土岐川で採集した陶片から12種類の Washed Pattern Tileを展覧。タイル製作の現場を見せていただく中で長江陶業さんと出会い、プロダクトへの道が開かれました」

そして2016年、プロダクトとして14種類の Washed Pattern Tileの販売がスタート。2021年には、モノトーンのRUBINシリーズ5種類も加わった。

岩瀬「今相談していることがあって、Washed Pattern Tileを割って、未来のタイルを作るシリーズを考えています」

村橋「海から流れてきてすり減ったようなエイジングしたタイル片を擬似的に作り、そこからデザインして、次の子孫をプロダクトにつなぐ。生命の再生を早回しするようなパターン

を模索しています」

一つの陶片から想像し、新たな模様を創造する、guse arsのアートワーク。Washed Pattern Tileには、不可思議なパターンの中に、時を超えた生命のつながりが宿っているように見える。

村橋「タイルを作りたいと考えるようになってから、縁もゆかりもなかった多治見の方へ自然と呼ばれ、さまざまな方々とつながることができました。guse arsは、これからもかけらをつないでいくことで、別のいろいろなものとながっていきたいと感じています」

作りたいと思う架空の世界を、軽々と作り上げていく。guse arsの創造は、どこまでも続いていこう。

※ Washed Pattern Tileの詳細は、34-35ページでご覧いただけます。